

## はじめに

Croft (2012) は、近年の動詞分類の研究において、動詞それぞれが持つ時間的な局面を分析することにより、語彙アспектを見極める手法が増えてきていることを指摘している (Croft 2012:48)。Botne (1983) や Botne et al. (2006) は、バントゥ諸語の動詞分類の研究において、特定のアспектを表す形式とある動詞が共起した場合に表される意味の差異に基づいて、それぞれの動詞が持つ時間的な局面を分析している。Botne によるアспект表示形式を用いた語彙アспектの識別方法は、現代のバントゥ諸語研究においても主要なアプローチとして定着している (cf. Seidel 2008、Lusekelo 2016)。しかしながら、Croft (2012) などが主張するように、同じ動詞でも文脈によって複数の語彙アспектに解釈が可能ながある (Croft 2012:37-40)。Botne et al. (2006) をはじめとしたバントゥ諸語の動詞分類の研究においてはこういった動詞の存在について説明はなされてこなかった。

そこで本発表では、ザンビア中央部で話されるバントゥ諸語のひとつであるランバ語の動詞の事例をもとに、バントゥ諸語の動詞の研究において Botne などが用いている時間的な局面を分析する手法だけに頼るのではなく、日本語における叙述類型論の研究からの知見 (cf. 益岡 1987、2008) を利用することによって、現行の Botne 流のアプローチではとらえきれなかった複雑な動詞のアспект現象を明らかにできることを示す。

## ●ランバ語の動詞構造 (□内の要素は必須、( )内は任意)

(前主語接辞) - □主語接辞 - □テンス・アспект接辞 - (目的語接辞) - □動詞語根 - (派生接辞) - □語尾

└──────────────────────────┘  
動詞語幹

## 1. 進行相を表す形式と動詞の語彙アспект

ある状態から別の状態への変化を表す動詞 (inchoative verb, cf. Botne (1983)) において、ランバ語ではテンス・アспект (以下 TA) 接辞 *luku-* と基本語尾 *-a* の組み合わせによって表される進行相の形式をとると、状態変化に至る過程を表すことができる。まず (1) は動詞 *um* 「乾く」が進行相をとった例である。副詞句 *paniini paniini* 「少しずつ」が後続し、服が完全に乾ききるまでの過程にあること

\*) 本発表は、特別研究員奨励費「ランバ語の記述およびその周辺言語との比較」(\*20J00285) と、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究 (2)」、「多言語混在状況を前提としたアフリカ記述言語学的新展開」の成果の一部である。

が表されている。(2) の *pi* 「焼ける」においても、進行相の形式によってパンに完全に火が通るまでの過程が表されている。

- (1)      *ilí*            *iláaya*            *li-Ø-luku-um-a*                            *panííni páníini*<sup>1</sup>  
           5.this            5.dress            9SM-PRS-PROG-get\_dried-BF      *little\_by\_little*<sup>2</sup>

「このドレスは少しずつ乾いていっている」

- (2)      *uyú*            *shínkwa*            *u-Ø-luku-pi-a*            *na*            *βukúumo*  
           1.this            1a.bread            1SM-PRS-burn-BF            and            14.now

「このパンはまだ火を通してている最中である (Lit: 今もなお焼けていっている)」

しかしながら、以下のように変化へ至るまでに過程があると想定されない動詞では、進行相の形式によって過程ではなく近い未来にその状態になるという意味が表されたり、そもそも動詞によっては進行相の形式が許容されないものもある。(3) のように *laal* 「寝る」では「近いうちに寝るだろう」という未来の意味が進行相の形式によって表されるが、*pusan* 「異なる」は (4) のように進行相の形式では非文となる。

- (3)      *ichíβusa*            *chanji*            *chi-Ø-luku-laal-a*                            *kani*            *chi-βon-e*            *áβensu*  
           7.friend            7.my            7SM-PRS-PROG-fall\_asleep-BF      if            7SM-see-SF      2.guests

「私の友人は客が来たら寝るだろう」

- (4)      \* *ilangulushi*            *lyanji*            *li-Ø-luku-pusan-a*                            *neeli*            *lyeenu*  
           5.opinion            5.my            5SM-PRS-be\_different-BF            and            5.your

(Int: 私の意見はあなたのものとは違ってきている／違うものになるだろう)

## 2. 複数の語彙アスペクトにまたがる動詞

上述のようにランバ語の進行相の形式は、状態変化に至るまでの過程を想定できる動詞においてはその変化に至るまでの過程を表すことができる。しかしながら以下に挙げる動詞 *kashik* 「赤くなる」

<sup>1</sup> 本発表で提示しているデータは、発表者が現地で行った調査によって収集したものである。ザンビア中部のコッパーベルト州の州都ンドラの中心部からほど近い場所にて、当時 60 代の女性 E.M 氏を調査協力者として採取を行った。E.M 氏は、初等教育から高等教育まで教育を修めており、ケニアへの留学経験もある。ランバ語のほかに、地域共通語であるベンバ語と英語を話す。

<sup>2</sup> ランバ語にはほかのバントゥ諸語と同様に「名詞クラス」と呼ばれる名詞の分類があり、名詞は 18 種類のグループに分けられる。主語接辞、目的語接辞、名詞修飾語は、それぞれ名詞クラスに呼応した形で現れる。例文のグロスで名詞の前に示している数字は、その名詞が属する名詞クラスを表し、名詞以外に付いている数字は呼応している名詞が属する名詞クラスを表す。主語接辞と目的語接辞は人称 (単数は sg, 複数 は pl) またはクラス番号で表す。

の場合、主語の違いによって進行相の形式に許容度に差が出てくる。以下のように主語が *amatóþo*「頬」の場合は (5) のように進行相の形式では頬が少しずつ赤くなっていく過程が表されるのに対し、(6) のように主語が *kaluþula*「血」だと進行相の形式は相容れなくなる。

- (5)      *amatóþo*    *eenú*      **a-Ø-luku-kashik-a**                      *paníini pániini*  
             6.cheeks    6.your    6SM-PRS-PROG-be\_red-BF    little\_by\_little  
             「あなたの頬は少しずつ赤くなっていている」
- (6)      \* *kaluþula*                      **u-Ø-luku-kashik-a**                      *paniini paniini*  
             1a.blood                      1SM-PRS-PROG-be\_red-BF    little\_by\_little  
             (Int: ? 血が少しずつ赤くなっていている)

「血が赤い」という普遍的な出来事を表したい場合、(7) のように接頭辞 *Ø-*、完了語尾 *-ile* の組み合わせによる形式 (以下 *Ø*-形式) を用いなければならない。また、主語が *kaluþula*「血」で動詞が *kashik*「赤くなる」である場合、*Ø*-形式以外のテンス・アスペクト形式は許容されない。

- (7)      *kaluþulá*                      **u-Ø-kashik-ile**  
             1a.blood                      1SM-PRS-be\_red-ANTF  
             「血は赤い」

なお、(7) の「血が赤い」において *Ø*-形式は対象そのものに本来備わっている永続的な状態を表しているが、以下の (8) の「頬が赤い」のように、一時的な状態も *Ø*-形式によって表すことが可能である。

- (8)      *amatóþo*    *eenú*      **a-Ø-kashik-ile**  
             6.cheeks    6.your    6SM-PRS-be\_red-ANTF  
             「あなたの頬は赤い」

仮に (5)～(8) において、Botne et al. (2006) をはじめとしたアスペクト表示形式を用いた識別方法によって動詞の語彙アスペクトを分析するとなると、動詞 *kashik*「赤くなる」は主語の別によって語彙アスペクトが異なる動詞だということになる。*palamin*「近づく」も、主語の別によって語彙アスペクトが複数にまたがる動詞のひとつである。

- (9)      *ichiþusa*    *chanji*                      **chi-Ø-luku-n-palamin-a**

7.friend 7.my 7SM-PRS-PROG-1sgOM-approach-BF

「私の友人が私に近付いてきている」

(10) \* íchaakúnwinamó ubwalwá chi-Ø-luku-palamin-a ne ng'anda yanji

7.bar 7SM-PRS-PRG-approach-BF and 9.house 9.my

(Int: ?店が私の家に近付いてきている)

(9) は *ichiβusa chanji* 「私の友人」が主語であり、進行相の形式によって話者に徐々に近づいていることが表されている。しかしながら (10) のように主語が *íchaakúnwinamó ubwalwá* 「バー」になると、進行相の形式は相容れない。「あるものとあるものが近くにある」ことを表すには、以下の (11) や (12) のようにテンス・アスペクト接辞 *li-*、完了語尾 *-ile* の組み合わせによる形式 (以下 *li*-形式) を用いる。(7)、(8) のように Ø-形式ではなく *li*-形式が用いられているのは、Ø-形式には *palamin* 「近づく」のように共起できない動詞があるためである (牧野 2019:30)。

(11) íchaakúnwinamó ubwalwá chi-Ø-li-palamin-ile ne ng'anda yanji

7.bar 7SM-PRS-ANT-approach-ANTF and 9.house 9.my

「そのバーは私の家の近くにある」

(12) íchinso chooβe chi-Ø-li-palamin-ile makosá kuli neβo

7.my 7.your 7SM-PRS-ANT-approach-ANTF 6.strength and 1SG

「顔が近いよ！ (Lit: あなたの顔が私のとても近くにある)」

### 3. 時間的安全性 (temporal stability) と叙述類型論

Ø-形式と、この形式と補完性のある *li*-形式は、(6) 「頬が赤い」や (12) 「顔と顔が近い」のように一時的な状態を表すこともできるが、(7) の「血は赤い」で見たような恒常的な状態、(11) 永続的な状態といったように時間の流れに影響されず成立する出来事も表すことができる。Ø-形式や *li*-形式によって表される時間の流れに影響されず成立する出来事には、以下のようなものもある。

(13) ímpata i-Ø-um-ile

9.desert 9SM-PRS-get\_dried-ANTF

「砂漠は乾いている」

(14) uluchéche lwanji lu-Ø-li-n-pal-ile

11.baby 11.my 11SM-PRS-ANT-1sgOM-resemble-ANTF

「私の子どもは (もう一人のほうの親ではなく) 私に似ている」

Givón (1984) は、動詞は「時間的安定性 (temporal stability)」の観点からすると名詞や形容詞などほかの文法カテゴリーと比べて最も不安定だとしている (Givón 1984:51-54)。しかしながら影山 (2012) などが指摘しているように、時間的安定性と文法カテゴリーはそのような一対一の関係にとどまらない (影山 2012:iii)。ランバ語においても、(7)「血は赤い」、(13)「砂漠は乾いている」といった普遍的な出来事や、(11)「ある建物とある建物が近くに位置している」や (14)「ある人がある人に似ている」といった時間的に最も安定している出来事が動詞によって表されている。

ここで益岡 (1987、2008) の叙述類型論の観点を取り入れる。叙述類型論では、「日本は島国だ」といった対象が有する属性を表し (益岡 2008:4)、時間的展開性が含意されない (影山 2012:12) ものは「属性叙述」、これに対して時間の流れに応じて展開する出来事を表す (影山 2009:1) のが「事象叙述」である。この叙述類型論の観点によれば、(5) の「頬が少しずつ赤くなっている」や (12) の「顔と顔が近い」のように時間の経過によって成立しなくなる出来事は事象叙述に該当し、(7) の「血は赤い」や (11) の「バーが自分の家の近くにある」、のように時間の経過に拘わらず成立する出来事は属性叙述である (cf. 益岡 1987、2008、影山 2009、2012)。

(6) において *kaluɓɓula* 「血」が主語である場合に *kashik* 「赤くなる」が進行相の形式をとることができないのは、「血が赤い」のは恒常的な状態つまり属性叙述であり、「頬が赤い」場合と違って状態に変化が生じ得ないからであろう。また、(10) において *ichaakumwinamó ubwalwa* 「バー」が主語である場合に *palamín* 「近づく」が進行相の形式をとることができないのは、「建物が別のある建物に近い」という状況が「人と人が近づく」場合と違って変化が生じるとは考えにくいからであろう。

こういった語彙アスペクトが複数にまたがる動詞に対して、新たな動詞のカテゴリーを立てるには無理があり非経済的だが (cf. Croft 2012:39)、上述のように叙述類型論の観点を取り入れれば以上のように正確な記述が可能である。ランバ語と同じくザンビアの南西部で話されるトテラ語においても、ランバ語の完了語尾 *-ile* と同源である *-ite* に属性叙述を表す機能があるという報告がある (Crane 2013:171)。Crane (2013) がすでに示唆しているように (Crane 2013:186-187)、バントゥ諸語の動詞分類やテンス・アスペクト体系において叙述類型論の観点を取り入れ分析を行うことで、バントゥ諸語研究に新たな知見が得られる可能性がある。

## 参考文献

Botne, Robert (1983) On the notion of “Inchoative verb” in KinyaRwanda. In *Le KinyaRwanda, langue bantu du Rwanda: études linguistiques*, (ed.) Francis Jouannet. Paris: Société d’études linguistiques et anthropologiques de France. pp.149-180.

- , Ochwada Hannington and Marlo, Michael (2006) *A grammatical sketch of the Lusaamia verb*. Köln: Rüdiger Köppe Verlag.
- Bybee, Joan, Revere Perkins and William Pagliuca (1994) *The Evolution of Grammar: tense, aspect, and modality in the languages of the world*. Chicago: University of Chicago Press.
- Crane, Thera M. (2013) Resultatives, progressives, statives, and relevance: The temporal pragmatics of the *-ite* suffix in Totela *Lingua*. 133:164-188.
- Croft, William A. (2012) *Verbs: Aspect and Causal Structure*. Oxford: Oxford University Press.
- Givón, Talmy (1984) *Syntax. Vol. I*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Lusekelo, Amani. (2016) Lexical Semantics and Selection of TAM in Bantu Languages: A case of Semantic Classification of Kiswahili Verbs. *International Journal of Society, Culture and Language*. 4-1: 89:102.
- Seidel, Frank (2008) *A Grammar of Yeyi: A Bantu Language of South Africa*. Köln: Rüdiger Köppe Verlag.
- 影山太郎 (2009) 「言語の構造制約と叙述機能」『言語研究』136:1-34.
- 影山太郎 (編) (2012) 『属性叙述の世界』東京：くろしお出版.
- 牧野友香 (2019) 「ランバ語のテンス・アスペクト体系の再検討」『スワヒリ&アフリカ研究』30:14-32.
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法：日本語文法序説』東京：くろしお出版.
- (2008) 「叙述類型論に向けて」益岡隆志 (編) 『叙述類型論』東京：くろしお出版. pp.3-18.

#### 略語・記号一覧

SM: Subject Marker	OM: Object Marker	AUG: Augment
PST: Past	PRS: Present	HOD.FUT: Hodiernal Future
ANT: Anterior	PROG: Progressive	
BF: Basic Final	SF: Subjunctive Final	ANT: Anterior Final

(yukatan\_0118@yahoo.co.jp)